漁民の移動に関するメカニズムの研究

—移動漁撈民ムズグンのホームランドにおける社会経済的変容の分析から—

平成 15 年度入学
派遣先国：カメルーン共和国
稲井　啓之

キーワード：移動，ホームランド，氾濫原，社会的ネットワーク，ムズグン

対象とする問題の概要

チャド湖盆地のほぼ中央部に位置するカメルーン共和国極北部州は，半乾燥気候でありながら水が比較的豊かな場所である。そして極北州東部のチャド共和国との国境となっているロゴーヌ川は，季節的に氾濫し漁撈をはじめ農耕や牧畜を行う上で重要な生態的機能を担っている。

しかし 1979 年に大規模な灌漑用のダムが完成したことで河川の氾濫が止まり，この地域の生態系に深刻な爪痕を残した。その後，1994 年より 2003 年までおこなわれた国際 NGO による生態系復元プロジェクトによってこの地域の生態系は回復した。この生態系の変化は，この地域で漁撈を主要な生業としている様々な民族に大きな影響を与えた。たとえば，ダムの完成からプロジェクトが完了した 30 年の間に，ロゴーヌ川流域で漁撈をいとなむムズグンは，カメルーン各地の水産資源が豊富で参入が容易な漁場を開拓して，季節的な移動漁を定着させた。

研究目的

この地域では，約 40 年前より遠方へ移動して行う漁撈が始まったと言われている。移動を始めた当時の世代の者も多く存命しており（図 1），そのライフヒストリーの聞き取り・分析から，移動の始まりから現代までの歴史を時間の流れをおって把握することが可能である。こういった歴史の聞き取りと，彼らのホームランドにおける生活(とくに漁撈活動)の実態の詳細な記述から，「移動」という現象を引き起こすまでのプロセスやその要因を社会・経済的に明らかにしたい。

図 1 .50 年前に M 村に嫁いできた女性

フィールドワークから得られた知見について

本調査は，カメルーン極北部州東部の漁村 M 村において行われた。M 村は，チャド共和国との国境となるロゴーヌ川流域に位置している。ロゴーヌ川は 10 月の雨季の半ばより増水・氾濫し，約 11,000 ㎢もの原野が水に覆われる（図 2）。この時期は，魚がチャド湖より産卵のために上流の氾濫原へと上ってくる時期であり，漁撈の最盛期でもある（図 3）。M 村は，50 年ほど前にこの地域の主要な漁民である

ムズグンやコトコなどによって季節的に利用される漁撈キャンプとして利用されたことに始まる。M 村のようにして成立した村がロゴーヌ川流域には数多く存在する。

M 村住民のライフヒストリーを元に社会環境の変化を分析した結果，1）1980 年前半までは M 村周辺のみで一家を 1 年間まかなえるだけの収入（＝漁獲量）があったこと，2)1980 年より M 村に定期市が開かれたこと，3）1970 年後半ー1980 年はじめより漁獲量が減少し，チャド湖をはじめ年を経るごとに遠方へとカメルーン各地の漁場へと移動を始めたこと，など約 30 年前を境に彼らをとりまく環境が大きく変化したことが明らかになった。

次に，M 村の人びとの社会関係の形成の場は，1）婚姻，2）定期市，3）遠隔地の漁場，に分けることができた。特に 2),3)については，親族・友人関係や売り手と買い手という社会関係の形成のほかに，ムズグンの移住による地理的拡散の過程で分からなくなってしまった同クランの者と出会いがあり，その場合は再び親族関係が修復されていた。彼らは，このようにして築いた社会的ネットワークを利用して，新たな漁場へ行くための情報収集や新たな漁場での滞在先などを模索しているものと考えられる。このように，約 30 年前を境に経済環境が急速に変化し，それにともなって社会環境もまたおおきく変化したと考えられる。

図 2.氾濫した時期の M 村

図 3.M 村で捕らえられたナマズの仲間

今後の展開・反省点

本調査では，ムズグンの漁撈活動を通した移動のメカニズムの解明をテーマに設定したが，今後は，移動先の漁撈活動の実態の記述や比較を行うことで，より広範囲，かつ歴史的な枠組みの中でのホームランドの位置づけをさらに明確にしたい。また，セネガルやマリからの移動漁撈民は，ムズグンが移動をはじめる以前から，カメルーンにおいて漁撈活動や商業活動に従事しているという情報を得た。こうした他の事例との比較・分析をおこなうことにより，西アフリカにおける「移動」に関する研究のなかで，本研究がどのような位置づけになるかを明らかにしたい。

また，本調査において得られた事例の中で，青年男性，特に生計活動から解放された老人が子供たちのために同クランの者を探すためだけに行く移動があった。これは，ムズグンの移住による地理的拡散によって離れてしまった親族関係の紐帯を再び緊密にしようという試みであると考えることができる。今後は，こうした事例を蓄積することにより，社会関係の構築および再構築という観点からも「移動」の考察をすすめたい。